

第五章 新京へ

卒業式を待たずに満州に赴くこととなった屋島君は京都の舞鶴から船に乗り、釜山を経由して大連に到着した。

不凍港を求めていた帝政ロシアが東清鉄道の終着点として作り上げた街大連。ロシア語で“遠い”を意味する“ダリー”が大連の名前の由来である。

この港を巡ってかつて日本と帝政ロシアが争ったのが日露戦争。大連のある遼東半島の先端に軍港旅順がある。

南満州鉄道に勤務できることは当時のエリートで、給与など待遇も良かった。苦労を重ねて大学まで出してくれた母親を、一日も早く連れてこられるようになりたいと思っていた。

一緒に日本から来た同僚たちと共に船を下りると、会社が用意してくれた幌付きのトランクがやつてきた。荷台に荷物を積み込んで、自分たちも荷台に上がると幌を閉められトランクは出発した。

大連の駅に到着すると、一行は駅長室に連れていかれ駅長の訓示を聞いたのちに新京行きの特別列車に乗ることになった。

鉄オタの屋島君は満州鉄道のダイヤグラムを全てそらんじていたが、この時間に大連を出発する列車はなかったため、特別列車だと考えた。皆列車好きな連中ばかりなので、日本とは異なる駅の様子や、日本より幅の広い広軌の線路、機関車に歓声を上げて興味深くてき込んでいた。

「それにしても、たかだか十数人の乗客のために特別列車を出すものだろうか？」
と思ったが、関東軍と思われる兵隊の一団がやつてきたので「なるほど」と思った。

軍人たちの制服を見ながら、まだ新しい汚れていない制服が多かったので、自分たちと同じ一年兵が連れてこられたんだと察した。

新入社員の一行はこの軍用列車の最後部の車両があてがわれた。

列車の一番先頭の車両には満州に慰問興行に来た一団がいたようで、その車両の周りだけ際立って人が群がっていた。新入社員一行はその前を通り過ぎ乍ら後部車両へと歩いた。能・狂言なら多少の自信があった屋島君であるが、本職の持つ迫力には圧倒された。ひと目でプロとわかる存在感。慰問団一行が手にしていたのぼり旗には「松山座」と書かれていた。松山みゆき嬢と目が合った屋島君はその目線の威力に息をのんだ。のぼり旗の下には「提供・秋田のツバサ広業」と書かれていた。

太陽が大地に沈むころ、特別列車はゆっくりと動き出した。新京には翌朝到着するのだからと思った。

動き出した列車を追いかけて来る青年がいた。松山座を追いかけられているファンだろうか？ やがて青年は列車を追い抜いて走り去ってしまった。

秋田のツバサ広業の枡谷社長にのぼり旗や横断幕の配達を依頼されてやってきたネロさんだった。

列車が出発する直前に辮髪を結ったおおがらな満州人の男が箱を運び入れた。それは夕食の弁当だった。

「全く弱ったもんだ。あいつら何度言っても数の勘定ができない。」
屋島君たちの指導に当たる背広姿の満鉄職員がぼやいた。

「数が足りないんですか？」

「足りないんじゃない。多すぎるんだ。二十六食多いな。前の車両の軍人さんが足りないんじゃないか？ちよつと聞いて来い。」

若い社員が急ぎ足で前の車両に向かい、おおがらな下士官を連れて戻ってきた。かなり場数を踏んだ疲れた制服を着て伍長の階級章をつけていた。

「すまんですのう。十五食ほど足りていなかったんです。食いもんだけはたと食わせてやらねば示しがつかぬところでした。」

年輩の満鉄職員は残りの弁当を全てこの下士官に手渡した。

「こりやまあ、こつあんです。わしらにや食いもんに関しちや”足りる”と言うことがありませんからなあ。有難くいただきたいときます。」

帝国軍人は随分威張っていると思っていたが、気さくな人もいるのだなと屋島君は思った。

「この車両にはサモワールがついとるんですなあ。さすが満鉄さんだ。こつそりお湯をもらいに来ますが、目えつぶつてやってください。」

サモワールと言うのは湯沸かし器のことで、通常の客車にはそれぞれ設置されており、車掌が石炭をくべながら管理しているのだが、貨物の延長線のような兵隊輸送の車両には水の入っていないサモワールが置かれているだけで火も入っていないかった。

戦地の修羅場をくぐってきた人は違う。と、今まで帝都で見ていた軍人とは異なる雰囲気
を屋島君は感じ取った。

弁当を食べ終えて車両の中の職員たちはそれぞれウトウトと眠り始めた。屋島君は窓の外を眺めていた。大連の町を離れると暗い闇がどこまでも続いているだけで、時折、人家の灯りが少しだけ見えてすぐに通り過ぎていく。町の中と外では全く異なる景色が想像された。この闇の中に与一君がいるような気がしたが、与一君は毎晩上海のキャバレーに出没していたのだった。

ふと、荷物の中に抹茶があることを思い出した。日本を離れる時にお能ちゃんと加奈子が持ってきてくれたものだ。

「今度は一人で自炊するんでしょう。向こうに付いたら開けてね。」

と、手縫いの前掛けも作ってくれた。だが、ゴスロリ風エプロンドレスでキツネさんの耳がついたヘアードレスまでセットになっていたの、”先に確認しておいてよかった”と、母親にプレゼントした。

抹茶と茶釜(ちやせん)と湯飲みを持って車両の扉を開け、通路の左にあるサモワールに向かった。

通路では先ほどの下士官がタバコを吸っていた。

「伍長さん。よろしければお茶を飲みませんか？」

屋島君は思い切つて声をかけてみた。

「おお、すみませんのう。日本のお茶ですか？それは”ご馳走だ。”」

屋島君は揺れる列車の通路で、お茶をたてた。

「抹茶ですか、本格的ですなあ。泡の立て方、表千家ですな。」

「いえ、見様見真似です。」

列車の中の立ち飲みでお点前も何もなかつたと思つた屋島君だったが、何故そんなことまで分かつたのだろうか？お茶のたて方はお能ちゃんに教わつただけだったが、表か裏かはわからないけどどつちか千家だつたような気がした。下士官はお茶を口に含むと、

「見事なお点前だ。宇治抹茶。これは、山城のお茶ですな。素晴らしい濃い茶だ。何年ぶりだろう。いいお茶だ。」

武人とお茶。そもそも茶道なんてそこから始まつているものだ。作法など関係なく体にしみこませるように一杯のお茶を飲むこの下士官に、お茶の神髄を見せつけられた思いがした。

「いいお茶だつた。ありがとうございます。こつちにいるとお茶はジャスミン茶ばかりで、日本茶が身に染みる。いいお茶だつた。本当にありがとうございます。」

「日本では茶道をなさつていたんですか？」

「とんでもない。そんな上品な人間じゃありません。京都で生まれ育つただけです。」

この下士官は、萌ゆる大空と名乗つた。

「ご武運をお祈りします。」

「おいしいお茶をありがとうございます。忘れえぬ、いい夜になりました。」

萌ゆる大空は前の車両に戻つて行った。

屋島君は一杯のお茶で心が抜け落ちるような感覚を覚えた。

朝早く、列車は南満州鉄道本社がある新京についた。

前の車両に乗っている兵隊たちは下りる気配がなかつたので、もつと北の戦地に運ばれるのだろうか。

新京、今で言うなら吉林省の長春。満州国の首都がある奉天(今の瀋陽)の少し北にある都市で、南満州鉄道の本社は奉天から新京に移つたばかりだつた。

一行は満鉄本社に入るとそれぞれの部署に分けられた。狸穴(まみあな・東京港区にある地名で、今のロシア大使館のあたり)の満鉄日本支社で見かけた顔もいた。

満鉄は満州ばかりではなく東南アジアにも路線を持つており、満鉄社員としてバンコクに勤務していた稲嶺一郎は後に参議院になり、その息子が稲嶺恵一元沖縄県知事である。

だが、屋島君が勤務した頃の南満州鉄道は関東軍交通監督部長だつた福井県出身の大村卓一が代表を務めており、軍事的な勢力の影響が強かつた。後に代表になる福島出身の小日山直登は南満州鉄道の生え抜きであるが、東京帝大出身だつたので、いやがおうにも屋島君はこの派閥争いに巻き込まれていくことになる。ちなみに最後の満鉄代表の山崎元幹は福岡県出身だつたので、”福”の付いた県から出てこなければ出世しないのかもしれない。

昭和二十年八月十五日を過ぎた後も満州一帯はソビエトの侵略を受けていたが、満鉄社員とその家族がソビエトの捕虜にならず無事日本に帰り着くことができたのは山崎代表の交渉術が功を奏したことはあまり評価されていない。

「お〜」

と満鉄本社の事務所に歓声が響いた。まだ自分の机も決まつておらず、応接用のソファー

に座っていた屋島君は立ち上がってその歓声の向けられた先を見ると、この世の者とも思えない美しいチャイナドレスの女性が目に入った。李香蘭である。

日本人でありながら中国人を装い、その歌と演技力で銀幕のスターとなり、日本軍のプロパガンダに貢献していた女優で、後の参議院議員山口淑子である。映画雑誌で何度かお目見かかった顔ではあったが、実物と出会うと彼女の持つ雰囲気は圧倒された。

李香蘭の背後の壁には同じ列車に乗っていた松山座の興行ポスターが貼られていた。

「どこかで見たような絵だな。」

屋島君は昨日大連の駅で見た松山座の顔触れとポスターの絵を比べて名前を覚えようとした。"ものすごい眼力の女性はみゆきさんというのか、メイド風の衣装をまとっていたのはめいりいさん。なるほどね。それにしても見覚えがある絵だ。"

ポスターを描いていたのはお能ちやんのお母さん。つまり龍笛さんだった。ポスターの下には「印刷 秋田のツバサ広業」と入っていた。"なんなんだ？ツバサ広業って？"屋島君は首をかしげた。

李香蘭を伴って事務所に入ってきた生意気そうな男と目が合った。満州映画協会の甘粕正彦だった。

プロパガンダ映画を作成するために特別列車を出して協力するよう満鉄に依頼に来たのだが、実態はほとんど圧力をかけに来たに等しかった。

「その青年。どきなさい。」

甘粕はソファーにいた屋島君を追いだし、李香蘭と座ると列車を停める場所と時間や、撮影に使う車種などを指定し、担当する職員は頭を抱え込んでいたが、屋島君は"いいんじやないっすかあ"と李香蘭を見つめながら思っていた。李香蘭は屋島君を一瞥すると軽く会釈をした。後に李香蘭物語を演じる沢口靖子や上戸彩より実物の方がいいと思う屋島君であった。

でも、やっぱり沢口靖子の方が断然いいと思っている作者であった。